

研究課題	未来の創り手に求められるリーダーシップとコミュニケーション能力の育成
副題	～生徒主体の学習活動、ふるさと貢献活動を通して～
キーワード	主体性、リーダーシップ、コミュニケーション能力
学校/団体名	公立八丈町立富士中学校
所在地	〒100-1511 東京都八丈島八丈町三根 4655-1 八丈町立富士中学校
ホームページ	http://www.hachijomachi-ty. ed. jp/fujichu/

1. 研究の背景

本校は島しょ部の小規模校である。「幼少期から一緒に過ごし、互いの個性を理解しているため、競争心が低く、役割が固定化しやすい。主体的に学習する力は十分に身に付いていない」と考え、キャリア教育の推進を行ってきた。その中で、地域の中で学ぶことで「人生や社会を良くすることができた」という実感が持て、自己有用感が高まり、主体性が育成されることがわかった。生徒が主体性をもって学習できるように令和2年度の研究テーマを「カリキュラム・マネジメントの推進～ワークショップ型研修を通して～」とし、甲南女子大学の村川 雅弘教授にご教授いただいた。「主体性の育成」を主眼に置いた教育活動を行い、コロナ禍においても生徒主体で運動会新種目を考案させることができた。新種目考案の取組は文部科学省 HP で紹介された。昨年末、GIGA スクール構想の一環として生徒1人に1台のタブレットノートパソコンが整備された。ICTを活用して考えの共有化・整理・保存をすることで行事や生徒会を生徒主体の活動にすることができる。また、ICTを活用した地域との協議・協働・発信する過程で八丈島に愛着を持ち、ふるさと貢献活動を通して未来の創り手に求められるリーダーシップとコミュニケーション能力を育成できると仮説を立てた。

2. 研究の目的

- ・生徒が将来の夢や目標を達成するために、ICTを活用して限られた時間をマネジメントする力と学習を振り返る力を高める。
- ・生徒どうしの分かち合いを実現させ、主体性を向上させる。
- ・「社会を良くすることができた」という実感を持たせることで自己有用感を高める。
- ・教育活動を発信する過程で、ICT活用力とプレゼンテーション力を身に付けさせることでコミュニケーション能力を高める。
- ・小学校、中学校、高等学校を通して段階的な教育活動を実施することで未来の創り手に必要なリーダーシップを育成する。
- ・ICTを活用して生徒の考えの共有化・整理・保存が図れることで生徒主体の学校文化の醸成と継承を行い、生徒がリーダーシップを発揮する機会が増やす。

3. 研究の経過

教科指導における ICT 活用を推進するために5月の授業観察では昨年10月に配布されたタブレットを活用した授業を行うこととし、授業観察の後に活用事例を教員間で共有した。12月には各教科でタブレットの活用実践例をまとめ、2月の情報リテラシー向上会議で地域・保護者・生徒に紹介した。生徒の意識調査を行うために7月と3月にコミュニケーションとリーダーシップに関する意識調査を行い比較検討した。

タブレットを活用した職員会議・委員会活動の効率化と工夫を1年間継続的に行った。職員会議では資料の印刷の手間が省かれ、資料に事前に目を通すことが可能になったため、校務改善に繋がった。委員会活動はタブレットを使用することで、生徒の考えの共有化・整理・保存が図れ、また、メールやチャット機能を活用することで放課後に集まる回数を減らすことができ、委員会活動の効率化を図ることができた。また、オンラインで繋がるのが容易になったため、島内外の小中高の学校と交流することができた。

今年度、新たな取組として3年生は避難所設営訓練、消火器訓練、避難所設営ゲーム説明練習を6、7月に事前に行い、9月の全校生徒による避難所設営訓練に備えた。3年生は1、2年生に説明することでリーダーシップを発揮することができた。避難所設営訓練の様子を12月に都立八丈高等学校の安全教育協議会で1、2年生の生徒会役員が発表することで、中高と地域で自助・共助の考えを深められた。

情報リテラシー教育として10月に全校生徒で縦割り班を作り、今年度のワンランクアップ学習方法発表会ではタブレットを活用した学習事例を紹介し合うことにした。11月に情報モラル教職員研修を経てから、12月に全校授業「SNS 八丈ルールを考える」を縦割り班で意見交換した。2月には目的に応じて発信する、人と適切にコミュニケーションをとる等、ICT を活用してやりたいことが円滑に行えた部分に焦点を当てた発表を今年度新たに企画した情報リテラシー向上会議の中で行った。この情報リテラシー向上会議に合わせて「タテヨコ連携 WS」を教職員、生徒、地域の方々と行い、小中高の繋がりや地域とのつながりの良い点、課題点を整理できた。

今年度は色々な取組を行ってきたので、3月には甲南女子大学の村川 雅弘教授を招聘して「マトリクスを用いた学校行事等の最適化」研修を生徒と共に行い、年間の取組を振り返った。また、他校の生徒による授業研究の様子を生徒とともにオンライン参観し、今後の参考にした。

令和3年度 研究の経過

時期	取組内容	記録
年間	・教科指導 ICT 推進	研究まとめ
年間	・職員会議、委員会活動の効率化と工夫	データで保管
6月～12月	・全校避難所設営訓練、防災教育の発表	生徒・教職員アンケート
10月～2月	・情報リテラシー教育	生徒・教職員アンケート
2月	・情報リテラシー向上会議（公開授業） ・「タテヨコ連携 WS」研修会（生徒参加研修会）	生徒・教職員アンケート
3月	・「マトリクスを用いた学校行事等の最適化」研修会	生徒・教職員アンケート

4. 代表的な実践

(1) 情報リテラシー向上会議

ICTを使うことで健康面、情報モラルへの配慮といった情報化社会の影の部分の対処方法を12月に学習した。2月に全校で「情報リテラシー向上会議」を開催して、ICTを活用してやりたいこと（目的に応じて発信する、人と適切にコミュニケーションをとる等）が円滑に行える光の部分に焦点を当て、年間の学習を振り返ることとした。また、7月に行った意識調査アンケートで「地域社会（八丈島）に、あなたがこれまでに貢献した（役に立てた）と思えることを教えてください」の回答で「海浜清掃」の回答が多数であり、回答に幅がなかったため、八丈島に貢献してきた地域コーディネーターの方とパネルディスカッションを行い、地域貢献やリーダーシップについて理解を深めてもらうことも合わせて行った。会議を開催するにあたって、中央委員会を中心に実行委員の募集をした。「情報リテラシー向上会議」は公開授業する旨をHPで周知し、オンライン配信をすることも伝えた。

公開授業「情報リテラシー向上会議」の前半はICTを活用した学習の振り返りを有志生徒7名による学習発表で行った。発表は国語、技術、生徒会活動の3発表とした。コロナ禍の開催であり、実行委員と発表者以外の生徒はクラスでオンライン参観する対応とした。国語では、同じ新聞記事「新年度 学級削減で教員2人減」（『南海タイムス』2019年3月22日）を元に小学校5年、中学校2年、高等学校2年の児童生徒が意見交流を行った授業を振り返った。文科省の「教師のバトン」にネガティブな書き込みが多いこと、ストレスを抱えての退職者や退職者が増えていることに着目した際に小学生から「教員の削減をどうしたら止められる」の言葉を受け、「私たち生徒一人一人が自主的に取り組むことが先生方の労働環境の改善に繋がる」と提案したことを発表していた。

授業後半の生徒4名（内一人はオンライン参加）と地域コーディネーターの方とのパネルディスカッションでは、コミュニケーションやリーダーシップ、地域貢献意識等について熱い協議がなされた。「継続する大切さ」が話題になったときは生徒が普段行っていることを伝え合っていた。ICTを活用して八丈島を発信していくことも地域貢献につながる視点を生徒に持たせることができたディスカッションであった。

「情報リテラシー向上会議」の後に本校のICT活用等の研究報告を行い、その後、オンラインで村川 雅



パネルディスカッションの様子



ICT活用など研究報告の様子



タテヨコ連携WSの様子

弘教授から指導を受け、「タテヨコ連携 WS」研修を実施した。生徒も含め「情報リテラシー向上会議」参加者を「小小連携」、「小中連携」、「中中連携」、「中高連携」、「地域連携」のチームに編成し、「連携のよさ」（青色）、「連携の課題・問題」（黄色）、「連携の改善・工夫」（桃色）に関して3色の付箋を使い、同じ形式のマトリクスシート上で意見交換した。生徒の声に耳を傾けることはタテ連携・ヨコ連携を図る際には重要であることに気付くことができた。



タテヨコ連携 WS の成果物

(2) マトリクスを用いた学校行事等の最適化

今年度は新たな取組を数多く行ったので、年間の取組を写真付きで全体行事、学年の取組、特別活動、安全教育などに区分けして、それらを全て1枚のマトリクスにまとめることで取組状況を確認することにした。3月に村川教授を招聘した研修会では情報リテラシー向上会議の実行委員生徒とともにこのマトリクスを使用してどの取組と取組に関連があるのか、効果的な取組は何で何であったか付箋を活用して意見交換することにした。教育活動全体を見るグループ（2G）、学年行事を見るグループ（1G）、特別活動を見るグループ（1G）の3種4グループに生徒と教員が混ざるようにした。また、熊本大学附属中学校の生徒による授業研究（響き合い学習）を生徒とともに参観して、今後の研修の参考にした。



生徒が結果を伝えている様子



響き合い学習を参観している様子

学年	1年生	2年生	3年生	学年	生徒会活動	部活・特別活動	特別活動・安全等
4月	4.8 交通安全委員会 4.8 交通安全委員会 4.8 交通安全委員会		4.24 読書研究会	4月	4.16 委員会・部活動研修会 4.16 委員会・部活動研修会 4.16 委員会・部活動研修会	4.27 読書発表会	読書・文化とつながる読書活動 読書活動の活用について、読書より読書
5月		5.31 1年修学旅行	5.10 読書研究会 5.10 読書研究会 5.10 読書研究会	5月	5.17, 18 修学旅行 5.17, 18 修学旅行 5.17, 18 修学旅行	5.11 読書発表会 5.11 読書発表会 5.11 読書発表会	読書・文化とつながる読書活動 読書活動の活用について(実例)
6月	6.10 7-6 読書 6.11 読書研究会 6.11 読書研究会	6.2-4 読書発表会 6.2-4 読書発表会 6.2-4 読書発表会	6.10 読書研究会 6.10 読書研究会 6.10 読書研究会	6月	6.17, 18 修学旅行 6.17, 18 修学旅行 6.17, 18 修学旅行	6.15 読書発表会 6.15 読書発表会 6.15 読書発表会	読書・文化とつながる読書活動 読書活動の活用について(実例)
7月	7.15 読書発表会 7.15 読書発表会 7.15 読書発表会	7.15 読書発表会 7.15 読書発表会 7.15 読書発表会	7.15 読書発表会 7.15 読書発表会 7.15 読書発表会	7月	7.15 読書発表会 7.15 読書発表会 7.15 読書発表会	7.15 読書発表会 7.15 読書発表会 7.15 読書発表会	読書・文化とつながる読書活動 読書活動の活用について(実例)

「マトリクスを用いた学校行事等の最適化」で使用した表の一部分

5. 研究の成果

①話し合い活動などで、自分が表現できてコミュニケーションが取れていますか
②ICT 機器の活用で、話し合い活動の中などでコミュニケーションが取りやすくなったと思いますか
③学校の活動の中であなたがリーダーシップを取ることができる場面がありますか
④他の人がリーダーシップを取りやすくするための、発言や行動が取れていますか

上記の①～④の質問項目を「よくあてはまる」「あてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の選択式の生徒アンケートを7月（69名回答）と3月（67名回答）に実施し、生徒のコミュニケーション①②とリーダーシップ③④に関する意識調査を行い、2回のアンケートを比較することで次の(1)～(3)の結果を得た。

(1) コミュニケーションに関わる質問①②では「よくあてはまる」が増加し、「あてはまる」が減少した。

質問	7月実施	3月実施	割合の増減
①話し合い活動などで、自分が表現できてコミュニケーションが取れていますか	よくあてはまる 33% (23人)	よくあてはまる 40% (27人)	7%増加
	あてはまる 52% (36人)	あてはまる 40% (27人)	12%減少
②ICT 機器の活用で、話し合い活動の中などでコミュニケーションが取りやすくなったと思いますか	よくあてはまる 23% (16人)	あてはまる 31% (21人)	8%増加
	あてはまる 52% (36人)	あてはまる 50% (33人)	2%減少

(2) リーダーシップに関する質問③④では、「あてはまる」の回答が増加し、「あまりあてはまらない」の回答が減少した。

質問	7月実施	3月実施	割合の増減
③学校の活動の中であなたがリーダーシップを取ることができる場面がありますか	あてはまる 32% (22人)	あてはまる 40% (27人)	7%増加
	あまりあてはまらない 36% (25人)	あまりあてはまらない 25% (17人)	12%減少
④他の人がリーダーシップを取りやすくするための、発言や行動が取れていますか	あてはまる 41% (28人)	あてはまる 51% (34人)	10%増加
	あまりあてはまらない 29% (20人)	あまりあてはまらない 12% (8人)	17%減少

(3) 3月実施アンケートでどの項目も一定数で「全くあてはまらない」と回答する生徒がいる。

①2% (2人)、 ②4% (3人)、 ③13% (9人)、 ④10% (7人)
--

また、2回のアンケートで「リーダーシップについて」、「八丈島への貢献について」、「自分がICT機器を活用して良かった点や印象に残った点」について聞いたところ次の通りになった。

～リーダーシップについて～

- ・「ない」「わからない」という回答が 10 人程度一定数いる。
- ・話し合いなどでリーダーシップを発揮できていると感じた記述が増えた。

～八丈島への貢献について～

- ・ 2 回とも「海浜清掃」、「ゴミ拾い」という記述が多数を占めた。
- ・「地域のことを発信する」ということが八丈島への貢献につながるという意識をもつ生徒が増えた。

～自分が ICT 機器を活用して良かった点や印象に残った点～

- ・プログラミング（HP 作成）を学ぶことができた。
- ・調べ学習などに活用できた。
- ・ICT を活用したほうが意見を出しやすい。
- ・HP 作成などで地域貢献ができて嬉しかった。

今後、アンケートで「全くあてはまらない」と回答している生徒やリーダーシップについて「ない」「わからない」と回答している生徒もいることから、個人ごとにアンケート内容の変容を追うことも必要である。また、「情報リテラシー向上会議」「マトリクスを用いた学校行事等の最適化」等でリーダーシップとコミュニケーション能力の育成モデルを作り上げ、考えを深めることが出来たので、今後は全校生徒で取り組んだり授業で取り入れたりしていく過程で資質・能力を育成していくためにどうすれば良いか、生徒の声を取り入れ、改良・改善しながら研究を推進していくことが重要である。

6. 今後の課題・展望

- ・ICT を活用したコミュニケーション能力（発表や会話をする力）とリーダーシップの育成を継続して行う。
- ・小中高の連携の強化を図る。合同児童会・生徒会の実施し、生徒主体の学習活動を推進する。
- ・防災教育を軸にした地域や学校間の連携と生徒の主体的活動を推進する。
- ・今年度の実践を踏まえ、年間の取組を見据えて、他校との交流活動を行う。
- ・生徒が年間の取組を振り返る過程で、様々な取組の取捨選択をして、生徒の声を取り入れたカリキュラム・マネジメントを行う。

7. おわりに

本研究によって生徒の声を聞くことの大切さを実感した。生徒が参加した研修会において、生徒は普段の教育活動で思っていることを伝えられたこと、年間を振り返り、次年度の取組に活かそうと思えたときに満足感を得ることができ、一方で教職員としても生徒の声を聞けたことは学校改善に有益であった。生徒主体の学校を創っていくためにも生徒の声に耳を傾ける学校でありたい。今回の研究活動は八丈島の方々のご協力、そして、研究推進においては甲南女子大学の村川 雅弘教授のご教授がなければ実現することはできなかった。今後も教育活動に携わる方々への感謝の気持ちをもって生徒とともに教育実践を重ねていく。

8. 参考文献 村川雅弘『子どもと教師の未来を拓く総合戦略 55』教育開発研究所